

福岡大学先端経済研究センター ワーキング・ペーパーシリーズ

個別神社信仰の近代における波及：宮地嶽神社の事例

山崎 好裕

福岡大学経済学部

WP-2021-002



福岡大学先端経済研究センター

〒814-0180 福岡県福岡市城南区七隈八丁目19番1号

個別神社信仰の近代における波及：宮地嶽神社の事例

山崎 好裕

概要

江戸時代には稲荷神や金毘羅神といった流行神が日本全国に波及して、津々浦々に多くの神社や小祠が作られるということがあった。近代でもそうした事例が見られることはたいへん興味深い。ただし、近代の場合、それは時代を反映した人々の願望を受け止めるかたちで、近代経済の発展や高速交通網の発展と深く関係していたという特徴が見られる。本稿ではその事例として、福岡県福岡市の宮地嶽神社を分析の対象とする。同社は無名の古社であったが、江戸時代に修験者によって信仰の基礎がつくられる。しかし、飛躍は明治中期から戦前期に起こった。筑豊地方の炭鉱の発展によって、同地域と深い結びつきのある地に所在する同社に富裕な人々の崇敬が集まった。また、鉄道網の整備が多くの参詣者を広範な地域から集めるのに役立った。川島澄之助宮司の手によって大正時代から昭和初期に広大な境内地の整備と豪壮な社殿の建築が行われた。また、戦前期を中心に浄見秋夫宮司が各地を周って、敬神講組織などを通じて信仰を普及させた。

JEL 分類番：N550, N750, N950。

キーワード：宮地嶽神社、廻船輸送、筑豊炭田、近代経済、鉄道旅客輸送。

Spreading Processes of Faith to a Special Shrine in the Modern Era : A Case Example in Miyajidake Shrine

Yoshihiro Yamazaki

Abstract

In Edo Era, the faith to Inari god and Kompira god spread all over Japan and people built many small shrines all over Japan. Even in modern era, we can find such a case. However, the modern era's example has its own character. People's desire for wealth and promotions is very unique to modern era. The spreading process is connected with the development of modern economy and high-speed transportation network. A good example is Miyajidake Shrine, Kyushu, Japan. This shrine was very old while it was not famous. Mountain ascetics tried to develop it in Edo Era. The leap happened between Meiji Era to World War II. Chikuho Coal Mine rapidly developed and many rich people appeared. The railroads brought many worshippers from the very broad area. Suminosuke Kawashima, the chief priest made a big earthwork and realized gorgeous buildings. Akio Kiyomi, the successor, visited so many places for propagation and made local groups of believers.

JEL classifications: N550, N750, N950.

Keywords: Miyajidake Shrine, marine transportation, Chikuho Coal Mine, modern economy, railroad transportation.

はじめに

江戸時代には、稲荷神や金毘羅神などの流行神への信仰が全国に普及するという現象が見られた。また、この信仰波及の背後に、京都伏見稲荷神社や讃岐金毘羅大権現といった個別寺社の動きがあったことはよく知られている。

そうした動きは明治以降の近代においても広く見られるものである。しかしながら、近代における個別寺社信仰の波及は、江戸時代のそれとは大いに異なる面があることも指摘しておかなければならない。近代以降の信仰波及は、近代経済の発展と一部の階層への富の蓄積といった事柄と深く結びついている。また、経済の発展と相即して鉄道を中心とする高速交通網の整備が図られたことも見逃せない。全国各地に見られる、寺社参拝を目的にした路線が整備されていった。

経済学的な比喻を用いれば、近代における個別寺社信仰の波及には需要面と供給面の両方の要因があったと言えるだろう。一方には、近代的な意味での致富や成功を求める、広く民衆一般に見られた上昇要求があり、それが個別寺社への強い崇敬となって現れた。他方では、そうしたニーズに触発されるかたちで、個別寺社側で社殿などの信仰インフラの整備と展開が図られることになった。これら需給双方の動きは、崇敬者の群れや自生的な信仰組織を個別寺社まで運んでくる鉄道網によって緊密に結合されていったのである。

本稿では、こうした近代における個別寺社信仰の波及を示す代表的な事例として、福岡県福岡市に所在する宮地嶽神社を取り上げる。

1. 江戸時代までの宮地嶽明神

文書記録に宮地嶽明神のことが最初に現れるのは、鎌倉時代にまとめられた『宗像宮年中諸神事供下行事』においてである。ここには、12月20日の嶽祭に宗像神社から神職・社僧が出向して祭典を催したことが書かれている。また、正平23(1328)年の『宗像年中行事』では、宗像神社75末社の条に、宮地嶽に祀る神として宮地嶽社、勝村大明神の社名・神名が見えている。そして、宮地嶽における年中行事を記録しているなかに、宮地嶽明神と総称される2社が並び称せられているが、それらは宗像三所大菩薩と勝村大明神である。¹

元禄16(1703)年に貝原益軒が黒田藩主に献上した『筑前国続風土記』には、藩内の小規模の社寺に至るまで詳細が載せられているが、不思議なことに宮地嶽明神の記述が見られない。わずかに、宮地村についての記述のなかで「此村神功皇后の暫く留り給ひし舊跡と云。村の上に宮地嶽と云高山有」²と記すのみである。

¹ 津屋崎町史編纂委員会(1999)、848ページ。

² 中村学園大学図書館ウェブサイト・貝原益軒アーカイブ『筑前国続風土記』巻之17・

加藤一純は、藩命で『筑前国続風土記附録』を寛政5（1793）年に完成させた福岡藩士だが、寛政3（1791）年に『宮地嶽三所大明神縁起』を草している。ここでは、中尊・宮地嶽大明神（本地・準胝観音）、左・勝村大明神（本地・大日如来）、右・勝頼大明神（本地・弥勒菩薩）と三尊構成の体系化がなされた。さらに、これらの神々について加藤は、次のような逸話を伝える。神功皇后の朝鮮出兵に際して宗像神が副将軍になったが、その配下に阿部丞相、藤高丸と介丸という武将たちがいた。戦勝の功で、阿部は宮地嶽城主に任ぜられ、高丸・介丸も宮地を所領とした。そして、彼らが宮地嶽の三神であるという。同じ加藤が宮地嶽明神の別当を秀嶽坊と記している。加藤が「神殿五尺間三間、社拝殿二間三間」と記しているところから、社殿の規模は村の鎮守として標準的なものである。³

これらのことを併せ考えると、江戸時代、元禄期から寛政期に至る過程で、修験者の手に宮地嶽の管理が移り、彼らによって旺盛な布教活動が行われていたことが推測される。そして、修験道の勢力拡大のきっかけとなった事件が、ちょうど間の時期に起こった宮地嶽古墳の出現ではなかっただろうか。寛保元（1741）年、宮地嶽で起こった山崩れによって、全長3メートル、高さ5メートル、幅4.8メートルの横穴式石室が突然口を開けた。延享4（1747）年に石室内に不動明王が祀られていることから、古墳が修行の場となって、多くの修験者が集まったのだと考えられる。⁴

福岡藩士の国学者・青柳種信は藩命で『筑前国続風土記拾遺』を編纂した。編纂作業は文化11（1814）年に開始され、青柳は完成を見ずに天保6（1835）年に没する。このなかに「宮地嶽大明神社、村中小高き山の上にある。石階数十級を登る」とあることから、現在のような石段が幕末までには築造されていたことがわかる。⁵

2. 明治以降の宮地嶽神社の変貌

明治時代になると、政府の宗教政策として神仏分離と修験道の禁止がなされた。そこでは祭神から本地仏など仏教的な要素が排除され、宮地嶽大明神阿部丞相、勝村大明神藤高麿、勝頼大明神藤助麿の三柱とされた。⁶社格は明治5（1872）年時点で村社であった。まさに村の鎮守程度の社勢であったことが窺い知れる。ところが明治32（1899）年になると、社格が郷社を飛び越して県社に急激に上昇している。⁷つまり、この間、30年ほどの変化がめ

宗像郡下。

³ 前掲書、849-850 ページ。

⁴ 同上、850 ページ。

⁵ 同上。

⁶ 同上、849 ページ。

⁷ 同上、847 ページ。

を見張るものであったということに他ならない。

最大の要因は、明治時代に入り、宮地嶽神社を擁する津屋崎村が急激に繁栄を見たことにあると思われる。津屋崎村は、明治6年の戸数682、人口1326から、明治22年には戸数760、人口3841に増加している。⁸その背景にあったのは、津屋崎を基地として、西日本の浦々を回って海上運送を担っていた五十集船の活躍であった。船の呼び名の由来は多品種を輸送するという意味で、50トン前後の小型廻船であった。九州一円からは博多に、本州はもちろん、北海道や四国からは下関に物資が集中した。津屋崎は2大物資集積地の間の中継港として機能していたのである。また、五十集船で津屋崎に集まった物資が、直接各地の小さな港へと運ばれていくことも多かった。五十集船として、津屋崎に三社丸、明社丸、蛭子丸が、渡に万豊丸などがあった。⁹

津屋崎千軒と詠われた繁栄を急激な衰退に導いたのは、明治23(1890)年の博多・赤間間の鉄道開業であった。九州鉄道会社の発起人総会が開かれたのは、明治21(1888)年8月15日、那珂郡春吉村の共進館においてである。九州鉄道会社は、農商務省商務局長の高橋新吉を社長に選出し、本社を福岡市に置いた。¹⁰

地元の福陵新聞は開業を祝って鉄道唱歌九州鉄道版を募集したが、その赤間駅の一節で「繁る彼方の山麓に宮地の社伏し拝み」と詠われている。このことから、宮地嶽神社が既に地元の有名神社になっていたことがわかる。¹¹

九州鉄道会社¹²は、明治22(1889)年12月11日に博多・千歳川間を、明治24(1891)年4月に門司・久留米間を、さらに、7月には門司・熊本間を開通させた。こうして、下関と博多の間で物資輸送を担っていた、津屋崎の五十集船の役割は鉄道に奪われることになった。¹³

時を同じくして、峠を隔てた筑豊地方では石炭産業が飛躍的な発展を遂げていた。津屋崎を石炭の積出港にすることを目的に、麻生多次郎を発起人総代とする津屋崎鉄道株式会社が、株主152人を集めて準備された。計画された鉄道の路線は、津屋崎を起点として、宗像郡田島・赤間・朝町、鞍手郡宮田、嘉穂郡庄司・幸袋・飯塚・弁分・高田を経て嘉穂郡大分村に至る約450キロメートルであった。資本金は130万円、本社を津屋崎村に置くことと

⁸ 同上、756ページ。

⁹ 同上、759ページ。

¹⁰ 同上、747ページ。

¹¹ 同上。

¹² 明治39(1906)年3月、鉄道国有法が公布された。九州鉄道会社も明治40(1907)年7月に国有化されている。

¹³ 前掲書、748ページ。

した。営業計画によれば、石炭約 62 万トン、貨物約 6 万トン、乗客約 11 万 7000 人を年間輸送し、年収約 16 万 5000 円を見込んでいた。¹⁴

津屋崎の築港計画も併せて進められ、建築予算として 75 万円が準備された。まず、津屋崎港南岸と渡半島突端の併せて約 7 万 5000 平方メートルを埋め立て、突堤と防砂堤に囲まれた港湾を整備する。埋立地には停車場、石炭貯蔵場、住宅地などが計画された。内務省は明治 30 (1897) 年に築港計画を認可し、鉄道も明治 32 (1899) 年 10 月に認可された。

しかし、日清戦争後の不況が計画を襲った。また、明治 34 (1901) 年 7 月 13 日からの 3 日間、筑豊炭田が集中豪雨に見舞われた。各炭鉱は浸水被害のために休業を余儀なくされた。鉄道会社は逓信大臣に仮免状延期を申請して許可された。翌年も再延期願が受理されたが、状況は好転しなかった。津屋崎鉄道株式会社は、計画の実現に着手できないまま、明治 38 (1905) 年に解散した。¹⁵

元々、津屋崎は魚の供給基地として筑豊と結び付きが深かった。魚の行商人や仲買人たちが津屋崎漁港に水揚げされる魚を、馬車や天秤棒で筑豊へと運んでいた。彼らは内陸へと出かけることから「おくいきさん」と呼ばれたが、現在宮若市となっている山口村の見坂峠は標高 178 メートルに達し、そこを越えることは厳しい労働であった。大正鉱業を営み、炭鉱王と呼ばれて著名な伊藤伝右衛門も 10 代のころは「おくいきさん」として働いた。¹⁶ 宮地嶽神社の石段下すぐに立つ二の鳥居は、伊藤伝右衛門が明治 39 (1906) 年 11 月に奉納したものである。



図 1 二の鳥居の伊藤伝右衛門奉納銘

¹⁴ 同上、748-750 ページ。

¹⁵ 同上、750 ページ。

¹⁶ 同上、765 ページ。

同年、宮地嶽神社は石版刷りの『筑前国宮地嶽神社真景之図』を、博多下新川端町の實行堂から発行している。縦 45 センチメートル、横 58 センチメートルの図絵であり、当時の様子を窺うことができる。

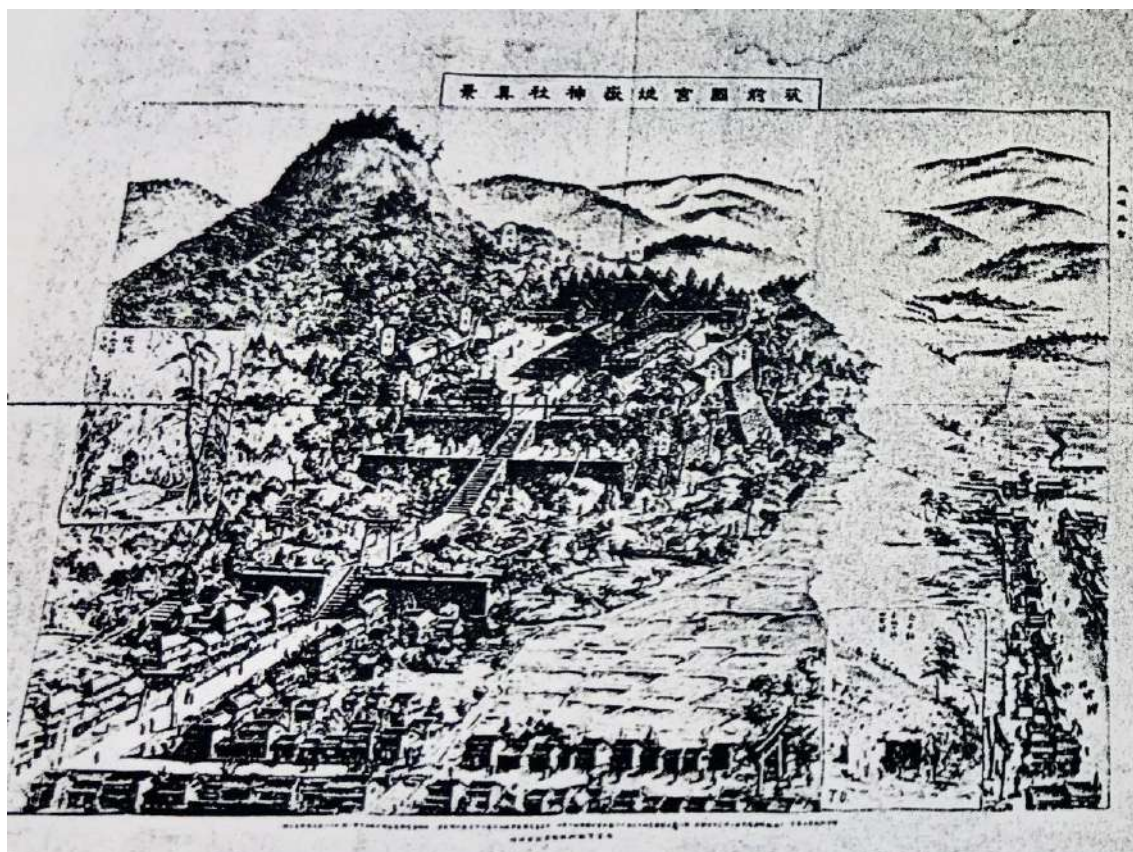


図 2 筑後国宮地嶽神社真景之図

現在とは異なり、石段を登って直ぐの正面に社殿が正対している。また、拝殿は壁のない、切妻屋根の簡素な建築である。

3. 大正時代から戦前までの宮地嶽神社の発展

富裕な炭鉱経営者たちの崇敬が集まることによって、開運の神としての宮地嶽神社の評判はいやがうえにも高まった。明治 40 (1907) 年 5 月 1 日付の九州日報は、津屋崎の状況をこう伝えている。「其繁栄を赤間停車場附近即ち土穴附近に奪われつゝあり。在自の金毘羅廢れて宮地嶽独り賽者を占むるが如く、津屋崎の繁栄は下西郷に移りつゝあらずや。」¹⁷

そんななか、津屋崎馬車鉄道が合資会社として設立認可され、増資の後に資本金 5 万円

¹⁷ 同上、763 ページ。

の株式会社として設立された。社長は立石新が就任し、本社を宮地村前田に置いた。路線は九州鉄道福岡駅から宮地嶽神社の鳥居前を経て津屋崎に至る 3.8 キロメートルであった。明治 41 (1908) 年 4 月に福岡駅から神社までを、翌年 8 月にそこから津屋崎までを開業した。乗客 16 人乗りの客車は木製の 2 軸車で、2 段屋根の太鼓型だった。これを、幅 91.4 センチメートルのレールの上を馬が引いて時速 10 キロメートル程度で走ったのである。このことからわかるように、宮地嶽神社の参拝者を当て込んだ観光鉄道であった。¹⁸

馬車鉄道は大正 13 (1924) 年、博多湾鉄道汽船株式会社に併合されたが、路線は津屋崎軌道線として昭和 14 (1939) 年まで運行した。博多湾鉄は大正 14 (1925) 年に和臼・宮地岳間を走る宮地岳線として蒸気運転で開業した。湾鉄宮地岳駅から津屋崎軌道線には、200 メートルの連絡支線が引かれた。¹⁹

グラフは津屋崎馬車鉄道の旅客数の推移を示す²⁰。旅客の全部が宮地嶽神社の参拝者ではないし、逆に参拝者のなかには、徒歩や乗合バスで詣でる人々もいる。しかし、大正時代に宮地嶽神社の参拝者が急激に増大している傾向を類推することは、十分に可能であろう。

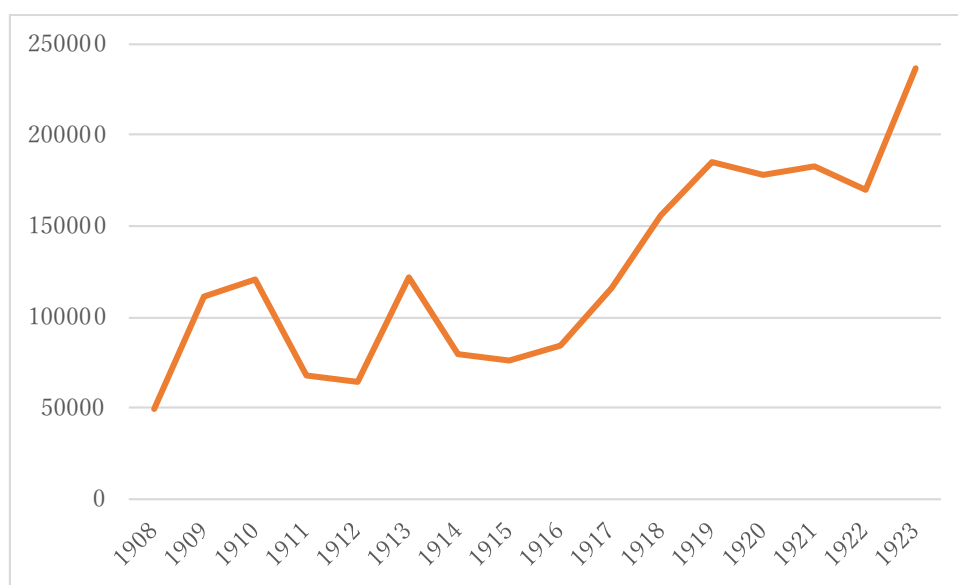


図 3 津屋崎馬車鉄道の旅客数の推移

宮地嶽神社のこうした繁栄を支えたのは、大正元 (1912) 年に社司に就任した川島澄之助の手腕であった。川島は嘉永元 (1848) 年 3 月 25 日に久留米藩士・川島文平の第 5 子として誕生した。明治維新後は郡長などを務めて従五位まで登り、勲五等の叙勲を得ている。社司としての川島は、従来の神社経営を大いに刷新したようである。大正 6 (1917) 年に社殿

¹⁸ 同上、725 ページ。

¹⁹ 同上、755-756 ページ。

²⁰ グラフは前掲書 755 ページの数値を用いて作成した。

の造営願を出して許可された。大正 11（1922）年に大規模な工事が起工されて、7 年の歳月をかけて現在の壮麗な社殿を完成させた。新社殿は、従前の社殿の背後の谷を、山を掘り崩して埋め立てることで広い平坦地を造成して、その上に台湾から取り寄せた材木を用いて建てられた。総額 800 万円以上がすぎ込まれたという。ようやくの竣工を見た社殿では、昭和 5（1930）年 10 月 22 日に遷宮祭が挙行された。²¹



図 4 社司川島澄之助翁像

²¹ 銅像基台銘文より。以下、全文を掲載する（句読点は筆者）。

筑後久留米人。舊藩士川島文平君之第五子也。為人剛嚴、幼而志文武有造詣。明治維新之際、挺身奔走于國事。得罪下獄後、遭赦仕官。累進為郡長。効力於教育、值産事。治績可見叙從五位勲五等。大正元年辭官補、本社社司就任之初。釐革社務、一掃宿類。六年、提造營社殿之議、請官被許。募淨財于四方、應者日夜不絶。十一年起工、鑿丘陵、填溪谷、以擴神域。取材于臺灣、締構。經七年而成。其資實八拾餘萬圓也。昭和五年十月二十二日、行遷宮鎮座祭。極盛儀。嗚呼、事業之大如此而一氣成之。雖由神威靈德之所致、神、亦非有翁經營努力之功、安能得觀此盛事哉。翁以嘉永元年三月二十五日生、今年齡方八十一、強健凌壯者。餘事親筆硯所著有久留米藩、難記宗教法論亦蓋昭代之人瑞也。於是諸有志胥謀茲建此壽像。以傳不朽云。〔昭和八年三月〕

昭和9(1934)年9月に川島に代わって社司に就任したのが、浄見秋夫である。浄見は明治10(1877)年11月25日に、代々英彦山権現の神職を務める家に生まれた。国学を学び、後進を育てていたが、大正2(1913)年9月に宮地嶽神社の神官の一人となる。浄見は川島による神社改革を間近に見ながら、それに大いに協力した。社司に就任して後は、九州とその周辺地域を何度も周って宮地嶽信仰の普及に努めた。²²



図5 社司浄見秋夫翁像

²² 銅像基台銘文より。以下、全文を掲載する（句読点は筆者）。

夫九州雖偏于、而海日本國發祥之地也。便富乎名神大社亦多方倦爲乎。敬神人心忠乎。奉齋亦可謂宜也矣。前社司浄見秋夫大人、人性凜、風土之粹。眞維考地之美、以明治十年十一月廿五日生於豊前國英彦山麓蔵北郷。累代爲彦山権現祝職。即應訓呪慎諸神祇、慈諸人倫長、而齋于里社。又究國學、從事於育英、有年於此遂。大正二年九月、被任宮地嶽神社社掌焉。於是輔社司川島澄之助翁、而薰於社務也。類翁秋日之威、以敢革積弊、推其春。恒之德以富于復興之難業矣。境域之擴張、殿舎之造頭、貴於幾十年後。夫數萬躬、蓋親昔盡瘁。無倦沙寒、著實十余回。其美大、即沫日仰之。其隆運、即諸人浴之。豈偶然武。昭和九年九月、社司爲。尔來復十有六年、拮据益勞、經營祗勤、乃至加周於鎮西、驗施著聞國中。社運之榮域、將無躬矣。時怡改築遷宮二十五周年。茲建設銅像一軀、以永彰層功于稜昆者也矣。〔昭和三十年十一月〕

おわりに

浄見およびそれ以前からの布教活動の成果の現れが、九州全域から山口県を中心とした宮地嶽神社分社の分布である。グラフは県別の宮地嶽神社分社の数である。²³

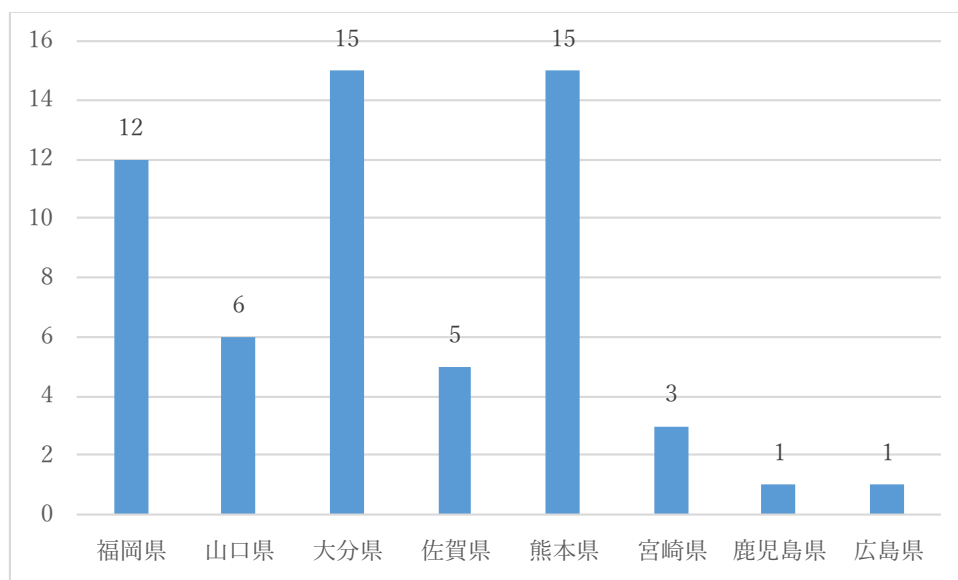


図 6 宮地嶽神社分社の分布

福岡県内の信仰伝播は当然のことであるが、大分県と熊本県で突出して崇敬者が多いことがわかる。もっとも、件数が少ないことが必ずしも信仰の薄さを意味するものではない。たとえば、山口県下関市の亀山八幡宮の境内社である宮地嶽神社では、宮地嶽神社敬神講が組織されていて、崇敬者による祭典が年2回行われている。講中では毎年5月22日近くの日曜日に、団体で宮地嶽神社本社参拝旅行が行われている。元々同社は慶応2(1866)年と勧請時期が古い。元の社殿が昭和20(1945)年6月29日の九州で灰燼に帰したため、昭和22(1947)年、市内貴船町の貴船神社社殿を移築して用いていた。現在の社殿は鎮座100周年を記念して昭和40年9月20日に造営されたものであるという。²⁴

おそらく、亀山八幡宮境内社のような宮地嶽神社敬神講は、大正時代から戦前にかけて各地で組織されていたものと考えられる。彼らは各地の宮地嶽神社社殿を守り、講中で高速交通網を利用しながら本社参拝を行う善男善女の群れの中心をなしていたものであろう。福岡県糸島市の伊都国宮地嶽神社も、そうした熱心な信仰の中心であったように思う。宮地嶽神社の崇敬者が分霊をいただいてきて、古くからの地元神社に合祀する例も珍しくなかったであろう。典型的なのは、長崎県長崎市の宮地嶽八幡神社である。社名のとおり、同地は

²³ 筆者調べ。

²⁴ 亀山八幡宮ホームページによる。

八幡町という地名であり、それほど古くない時期に宮地嶽神社を八幡宮に合祀したものと考えられる。

講を作らない個人の崇敬者が分霊をいただいて、私有地などに小祠を建てて宮地嶽神社として祀る例も数多い。現在既に存在を確認できなくなっているが、広島県広島市の宮地嶽三柱明神神社が典型例であった。グラフに数えた分社のなかにもそのような形態のものは数多い。江戸時代の流行神であった稲荷神を屋敷神として祀るのに近いものがある。

特異な例としては、現在天理教の傘下にある宗教法人・天光中心会の、熊本県山鹿市にある本部名称が宮地嶽九州本殿となっている事例がある。

【参考文献】

津屋崎町史編纂委員会編『津屋崎町史』通史編、1999年。